

白川村新庁舎建設事業基本設計・実施設計業務 公募型プロポーザル 審査結果報告

令和7年3月31日

プロポーザル審査委員会 委員長 恒川和久

1 審査結果

白川村新庁舎建設事業基本設計・実施設計業務 公募型プロポーザル審査委員会（以下「審査委員会」）は、厳正かつ公正に審査を実施した結果、次の者を最優秀者に決定した。

最優秀提案者：株式会社 SALHAUS 一級建築士事務所（No.15 の提案者）

次点優秀提案者：株式会社 浦野設計 岐阜支社（No.10 の提案者）

2 審査委員会

名古屋大学大学院工学研究科 教授（建築計画） 恒川和久（委員長）

名古屋工業大学大学院工学研究科 教授（建築デザイン） 加茂紀和子

同志社女子大学人間生活学科 准教授（都市計画（景観）） 麻生美希

名古屋造形大学 名誉教授（ランドスケープ・デザイン） 岡田憲久

白川村 村長 成原茂

白川村 議会議長 大田忠広

白川村 新庁舎建設検討委員会委員 沢田政幸

3 審査の経緯

(1) 第1回審査委員会

令和6年12月12日（木）に開催した第1回審査委員会において、プロポーザル実施要領等を策定した。

(2) プロポーザル実施要領等の公告

令和6年12月16日（月）プロポーザル実施要領等を村ホームページにて公開した。

(3) 一次審査に関する質疑書の提出と回答

令和6年12月23日（月）までの期間で質疑書の提出を受け、12社から質問書が提出された。令和6年12月27日（金）に、質問に対する回答を村ホームページで公開した。

(4) 一次審査書類の提出

令和7年1月29日（水）午後5時まで受付を行い、18社から一次審査書類が提出された。

(5) 第2回審査委員会 一次審査の実施

令和7年2月4日(火)、事務所、配置技術者、実施方針等の内容、および技術提案書(課題1)について、書類審査、評価を行い、委員間で十分な意見交換を行った後、評価の高い上位5社を二次審査の対象者に決定した。

(6) 二次審査に関する質疑書の提出と回答

令和7年2月14日(金)までの期間で質疑書の提出を受け、令和7年2月21日(金)に、質問に対して回答した。

(7) 二次審査書類の提出

令和7年3月19日(水)午後5時まで受付を行い、5社から二次審査書類が提出された。

(8) 第3回審査委員会 二次審査の実施

令和7年3月24日(月)5社によるプレゼンテーション(15分)、質疑応答(20分)を実施した。その後、二次審査を行い、各審査委員が採点、十分な議論を行った上で、最優秀提案者、及び、次点提案者を選定した。

4 審査講評

(1) 総評

今回の白川村新庁舎建設プロポーザルの二次審査では、「村民の安全・安心を支え、利便性が高く、環境にやさしい庁舎」という基本理念のもと、①白川村の景観に調和し長く親しまれる庁舎、②防災の拠点として安心・安全を備えた庁舎、③省エネルギー・省コストに配慮した庁舎、という3つの課題に対する総合的な応答が求められた。また、世界遺産を有する地域性と豪雪地という厳しい自然条件への的確な対応も、提案において不可欠な要素であった。

参加各社は、これらの課題に対し真摯かつ丁寧な提案を行っており、その設計姿勢は高く評価された。特に景観への配慮においては、合掌造りの形式的な模倣にとどまらず、白川村の風土や自然環境を踏まえて現代的に解釈した試みが多く見られ、地域性と未来像の両立を図る姿勢が印象的であった。また、防災拠点としての信頼性を高めるために、木造を含めた構造形式の適切な選定や、積雪時の人や車の動線計画など、多面的な検討がなされていた。特に、防災センターの平常時と非常時における柔軟な利用をどう設計に織り込むかという点では、各案に設計思想の違いが明瞭に表れていた。

環境性能に関しては、Nearly ZEB や ZEB Ready の実現を目指した提案が多数を占め、木質バイオマス、地中熱、太陽光発電などの自然エネルギーの活用にも積極的な姿勢が見られた。一方で、雪処理や融雪への現実的な対応、維持管理の負荷とのバランスにおいては、理想と実務の間に開きがある提案も散見された。

その中で、最優秀案に選定された No.15 案は、3つの課題に対して最もバランスよく、かつ創造的に応答しており、空間の開放性と防災性、環境性能と地域性の融合、

さらに村民と共に使い育てていく空間構成が評価された。将来的に白川村の新たな象徴となるポテンシャルを持つ提案である。

いずれの提案にも、白川村という固有の風土に対する深い理解と愛着が感じられ、審査委員一同、慎重かつ丁寧な議論を重ねて評価を行った。最優秀案のみならず、他の提案にも今後の公共建築のあり方を示唆する優れた着想が多く含まれており、本プロポーザル全体が非常に意義あるものとなった。

(2) 個別講評

【No.2】

敷地北側に建物を寄せ、造成を最小限に抑えつつ、高低差を活かしたピロティ形式で職員駐車場を多く確保した構成は高く評価された。また、じゃかご擁壁や円筒分水など、地域固有の要素を丁寧に建築に取り入れた点にも構想力の豊かさが表れていた。建物外周を囲む半屋外空間やルーバーの提案も意欲的であったが、白川村の文脈に即した妥当性や実効性には疑問も残った。結ひろばは交流の核となる空間として期待されるが、採光や冬季の環境、周囲とのつながり、防災センターの平常時利用の具体性について課題が見られた。全体として完成度は高いが、地域性と機能性の統合において他案に一步譲る結果となった。

【No.10：次点】

敷地の読み解きと、村民の声から得た課題を設計に丁寧に反映した提案であり、実効性と合理性の点で高く評価された。基本計画における道路位置を見直し、敷地形状を振って建物を配置することで造成量を減らし、勾配を緩やかに抑えた点は特に優れていた。大階段を軸とした空間構成は、村民の交流と日常的な使いやすさを両立しており、ZEBを見据えた設備計画も実行力を感じさせた。一方で、建築の造形的な力強さや象徴性にはやや乏しく、大階段の冬季利用に関する現実的対策にも不安が残った。最後まで最優秀案の候補として議論されたが、象徴性や冬季運用の確実性の点から次点にとどまった。

【No.11】

南北に大きく広がる大屋根を特徴とした案であり、白川村の風景と調和しながら、地形を積極的に取り込んだスケール感ある提案が印象的であった。防災広場を守るRC構造の基礎や、大屋根の木架構による構造的な信頼性も高く評価された。また、地域住民が日常的に利用できるヒロマ空間の提案や、公民館的な柔軟な運用も意識されていた。一方で、前面道路の勾配や駐車場の配置、雁木テラスへのアクセス性などに課題があり、防災センターの動線もやや奥まって使い勝手に難があるとの指摘があった。象徴性と堅牢性を備えた提案であるが、運用面での課題が評価を分けた。

【No.15：最優秀案】

丸太を用いた力強い木架構による切妻屋根の下に、地域に開かれたビレッジフォーラムを配置する構成は、白川村の未来を象徴する公共空間として高く評価された。庁舎を単なる行政機能にとどめず、村民と職員が共に過ごし、共に創る空間とする構想は先進的であり、空間の開放性と防災性、日常性と非常時機能の融合が見事に設計に落とし込まれていた。PCaPC 造による大空間と丸太架構を組み合わせたハイブリッド構造を採用し、通風・日射のシミュレーションに基づいた高い環境性能も提案されている。白川村の伝統的景観に対しては直接的に模倣するのではなく、合掌造りを現代的に解釈することで独自の造形性を提示しており、景観との新しい調和のあり方を示している。一方で、屋内駐車場の確保や勾配道路、吹込み対策など、実施設計段階での課題も残されているが、これらは丁寧な設計プロセスによって解決可能と判断された。地域性、象徴性、機能性、将来性の全てにおいて最も高い評価を得て、最優秀案に選定された。

【No.18】

地域資源の活用を前面に打ち出した提案であり、村産材や木質バイオマスによるエネルギー自立の構想は、SDGs への明確な意識が感じられた。積雪への対応として屋根構造を分割し、建物スケールを調整するなど、自然条件への配慮も意識されていた。一方で、建物内部の構成や動線計画にはやや窮屈が見られ、中心部の閉鎖性、除雪対応、流末処理の安全性に対する具体的な対応が不十分であるとの指摘があった。バイオマス利用も運用・管理の観点で実現性に不安が残り、提案としての総合的な成熟度にはやや欠ける印象となった。熱意と地域愛に溢れた提案であるが、庁舎としての機能性・柔軟性・実行力において他案に一步及ばなかった。

以上